

伊丹の歴史

伊丹の歴史をひもとくと、発掘される遺跡や出土品から縄文時代にさかのぼります。

縄文時代晩期には阪神間では初めての米作りが始まり、続く弥生時代には本格的に行われました。口酒井遺跡はその頃の遺跡です。

御願塚古墳に代表される古墳時代を経て、奈良時代には僧・行基が昆陽池を築造し、昆陽施院（現在の昆陽寺）なども建立しました。また、伊丹廃寺（国指定史跡）が建てられたのもこの頃です。

平安時代の伊丹には、都の貴族や大社寺の荘園が多数作られました。その一つ摂関家領橋御園を鎌倉時代から管理していた伊丹氏は、南北朝時代には伊丹城を築き、さらに戦国時代には摂津国の3分の1を支配するまでに成長しました。

天正2年（1574年）、荒木村重が代わって城主となり、城の名も有岡城と改めて、ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスも称賛した名城に改修しました。しかし、同6年（1578年）、村重は主君・織田信長に背き、10カ月の籠城の後、信長の諸将に攻め落とされました。その城跡は国指定史跡として整備されています。

寛文元年（1661年）、伊丹郷町のうち伊丹・植松・高畑など10カ村（後には12カ村）が近衛家領となり、川辺郡の経済・文化の中心として栄えました。近衛家が力を注いだ産業の振興はめざましく、とくに伊丹で作られた酒は「伊丹酒」「丹醸」として、江戸の人々に愛飲されました。また、郷土が生んだ俳人・上島鬼貫は「誠の外に俳諧なし」と悟り、数多くの秀句を残しました。そうした風土から形成されたのが、日本三代俳諧コレクションの一つ「柿衛文庫」です。

近代に入り、明治4年（1871年）、近衛家領は兵庫県に編入され、以後数回の変遷を経て、同22年（1889年）、町村制にもとづく伊丹町となりました。また、同24年には川辺馬車鉄道が開通し、のちに大阪と舞鶴とを結ぶ阪鶴鉄道に発展しました（現在のJR福知山線）。さらに、大正9年（1920年）には阪急伊丹線も開通し、これら鉄道によって産業経済が促進されるとともに、近郊住宅地としても発展してきました。

そして、昭和15年（1940年）11月10日、伊丹町と稲野村が合併し、全国174番目の市として市制を施行、同22年（1947年）、神津村を編入、同30年（1955年）には長尾村の一部を編入して現在の市域となり、今年、令和2年（2020年）11月には、市制施行80周年を迎えることとなります。